

# SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

## 月刊シナピスニュースレター

Vol.  
106

2025. 3

年間テーマ ～あきらめない 平和への道を とともに～



2013年3月、宮城県気仙沼市で見た光景は、あの日から2年を経過しているにもかかわらず愕然とさせられました。この時期に春の訪れを告げるミモザ。私たちの心も幹から細い枝に分かれていても、遠くから見れば木全体を覆うような優しさで、一つの希望の花となれますように。(写真と文：六甲教会 沖田耕司さん)

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。  
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、  
愛し合うように願って平和の種をまき、  
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区  
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203  
Email/sinapis@ostk.catholic.jp  
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

# 巻頭言

## 「見よ、それはきわめてよかった」 それなのに…



聖パウロ修道会 ブラザー阿部 光一

「神はこのとてつもなく広大な宇宙を、何のために、誰のために創造されたのだろうか」…。これは、近頃思っていることの一つです。

私たちの住む地球は、主星に太陽という恒星を持つ太陽系の一つの星です。

太陽までの距離は1億5千万キロ、光の速度でも約8分かかります。今見ている太陽系の星はさらに遠いし、この太陽系を考えるだけでも大きく広いのに、このような恒星がいくつも集まって銀河系、さらに銀河系のような星の集団が無数にあるといえます。

現在言われている「宇宙の果ての大きさ」は、138億光年の距離にあるといえます。そして、今も広がっていると…。

天文学の進歩により、今の私たちはこのようなことが分かっていますが、二千年前のイエスの時代、さらにもっと昔の旧約の時代には知る由もなかったでしょう。

それでも、この世界が一人の創造主によって創られたということを理解していました。

「見よ、それはきわめて良かった」(創世記 1 :13)は、神を信じる信仰をもって記された救いと希望を指し示す言葉です。

それなのに、今の地球はとても危うい状態に置かれています。ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナ、ミャンマーの内戦等など…。第二次世界大戦における数多くの体験にも懲りずに、地球全体に ひと時の平和さえも訪れないのはどうしてなんだろうと思います。

神様は、創造の最後に人をお造りになりました。ご自分の愛を示したくて…。

それなのに私たちは、それをないがしろにしています。ご自分の最愛の子・イエスをこの地上に送り、「このように生きなさい」と示され、自らの死と復活によって、かけがえのない希望の光をもたらしてくださったのに、今もこの時間も大切ないのちが奪われていっています。

今の地球の状態をととても憂いておられる神様、一人ひとりのいのちを大切に思っておられる神様、どうぞ憐れんでくださいと祈るばかりです。

東日本大震災から間もなく 14 年。亡くなられた一人ひとりのいのち、その一人ひとりにご家族がおられ、その悲しみは消えることがありません。その一人ひとりが神様のみもとで安らかでありますようにと祈ります。



平和月間テーマと趣旨について



## 希望と平和の巡礼者となろう

### ～苦しむ人、悲しむ人とともに歩む道～

Let's be Pilgrims of Hope and Peace

— A path to walk with people who suffer and grieve —

今年から大阪高松教区は、従来の10日間の平和旬間を拡張し7～8月の2か月間にわたる「平和月間」を新しく設けることになりました。このため、ゆとりをもって計画を立てられ、他教会の企画に参加する可能性も広がると思います。「日本カトリック平和旬間」は、「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです」という聖ヨハネパウロ二世の広島平和アピールを受けて始まりました。「戦争は人間のしわざ」であるなら、戦争を終わらせ、人間の尊厳にもとづいた平和な世界を作る力もまた、私たち人間は持っていることを信じて歩み続けたいと思います。

さて、今年から始まる平和月間のテーマは、上記のように聖年の標語に「平和」という語を加えたスローガンにさせていただきました。世界に希望を証しする聖年の恵みの時、特にこの二か月間は平和について学び、分かち合い、神様の呼びかけに耳を傾ける機会を、皆で持てるように願っています。

現代の世界に目を向けると気候変動による異常気象の影響を受けている地域が増えています。また、他民族との争いや戦火に巻き込まれたり、自国の政権による圧迫を受けて、人間らしく生きるありかたを奪われ、尊厳を脅かされる人が後を絶ちません。苦しみと悲しみの中で「本当に神様はおられるのだろうか」「今日の日を生き延びる恵みをひたすら祈るしかない」等と感じる人々が世界にはあふれています。そしてとりわけ難民の境遇は、受け入れ先での差別・無関心によってさらに厳しいものとなっています。

日本では、直接の戦闘こそありませんが、似たような現実があります。将来への不安を抱えた人が世代を越えて多数となっています。さらに、皆で手を取り合い助け合うよりは、自分だけや自分の家族のことだけしか考えられない人が増え広がりつつあります。アジアの隣国との関係も悪化するばかりで、話し合いによる平和的な共存とは真逆の方向に向かっているように思えます。

誰が私たちの隣人でしょうか。私たちは、どこで誰と正義と平和に根差した希望を分かち合うべきでしょうか。見えない隔ての壁を越えて外に出向き、世界とともに歩む（シノドス的）教会となっていけるように、それぞれで取り組みがなされることを願います。

2025年2月8日 全地区宣教評議会代表者会議

## 原発を必要としない社会の実現を目指して（3）

カトリック六甲教会信徒 古泉 肇

以前、新山口駅のホームに立っていると、「のぞみ」が時速 300 kmで通り過ぎていきました。乗車している時には感じませんでしたが、すぐ目の前を「のぞみ」が最高速度で走っているのを見ると、そのスピードに恐怖を感じました。

現在、東京～大阪間を 1 時間で結ぶリニア新幹線の工事が行われています。

「のぞみ」の 2 倍の時速 600 kmで走るリニアモーターカーの速さは、私たち人間の想像を遥かに超えていると思います。

多額の費用をかけて自然を破壊し、強い電磁波が発生し、東京一極集中をさらに加速させ、地上を超高速で走るリニア新幹線を作る必要があるのでしょうか。

専門的な知識が無い私達でも、違和感があることを理由にリニア建設に反対し続けることは大切だと私は考えています。

私が原発を必要としない社会の実現を目指そうと主張すると必ず、原発賛成派の人から「反原発」のレッテルを貼られます。そして「日本は地震大国で原発を設置するのに適さない」、「原発から出る核廃棄物を 10 万年間安全に保管する場所が国内にない」と主張しても、科学的根拠のない感情論であると否定されます。

しかしながら、反原発の主張に真摯に向き合わず、「反知性主義」と言って全否定する科学者の方が非科学的であると思います。

また原発賛成派の科学者の中に、実は電力会社の株を持っている人がいたという話も聞いたことがあります。経済力・政治的権力・学問的権威が無くても、私達は「感性」を武器に団結し、原発に反対することが出来るのではないのでしょうか。

2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震の震源地である珠洲市は、実は以前、原発建設予定地でした。1975 年頃、現在の珠洲市に原発建設が計画された後、市民による反対運動が起り 2003 年に計画が凍結されたのです。

もし珠洲原発が計画通り造られていたら、能登半島地震により福島第一原発事故に匹敵するほどの大事故が発生した可能性があります。

ところが地震・豪雨・大雪と自然災害が続き被災地の復興が進まない中、原発建設賛成の立場の人からは、「原発を造っていたならインフラ整備も出来たから復興が進んだ」、「過疎の町を発展させるため原発が必要」という趣旨の発言が出ているのです。

被災地の復興、過疎の解消を大義名分として原発建設計画が復活しないとも限りません。原発を必要としない社会の実現に一步でも近づくために、私は過疎化（それは東京一極集中と表裏一体です）の問題にも取り組むことが大切なのではないかと考えています。



## ガザ停戦合意において報道が語らない真実とは？

シナピス運営委員 西口信幸

ガザの報道では常に、事実の一部を切り取り、真実を伝えようとしない報道がされてきました。停戦後の人質交換のやりとりでも事実を誤認させる報道がされていますが、トランプ大統領の出現により、多くの報道が犯している大きな過ちが二つあるように思います。

ひとつは、「占領」という事実に向けずイスラエルに片寄った報道であること、もうひとつはトランプ大統領の思いつきのような突飛な発言が用意周到な戦術に基づいた綿密な計画であることへの理解への欠如です。人質交換において何が起きていたのか、そしてトランプ発言の裏で何が行われているのか、を通して「ガザの今後」を考えてみたいと思います。

### 人質交換において何が起きたのか？

NHK報道より（2月11日から14日）

先月19日から続いてきた停戦、人々は破壊された土地で生活を立て直そうとしています。そうした中、復興の行方を左右する停戦合意事項である「人質解放」を「延期」としたハマスの発表に対して、イスラエルは激しく反発して「次の戦争は地獄の門を叩くことになる」と強くけん制、予断を許さない状況が続いています。エジプトなどの調整によりハマスは一転して、予定通りの人質解放となりました。一方イスラエル報道官は厳しくけん制、双方が鋭くけん制する中、停戦合意が着実に履行されるのか不透明な状況が続いています。

国連OCHA（人道問題調整事務所）が伝えている事実は、

1月19日以降、29回の空爆、9回の地上侵攻、92人の民間人殺害、家屋の破壊、燃料、援助物資、テント、仮設住宅、重機の搬入不許可、援助活動の妨害など、イスラエルの停戦合意違反は270件、西岸地区の強制移動、侵略、破壊活動、襲撃事件が報告されています。

ハマスは停戦後、実に忠実に合意事項を実施していました。ここで多くを語ることはできませんが「イスラエルは停戦合意違反を繰り返した。」の一文が必要であり、次のステップに向かう前に合意事項の実施を要求することは当たり前なはずで、「報復の連鎖」という言葉の前に「イスラエルによる暴力、占領、抑圧、支配」が最初に来ないと真実は見えてきません。

北ガザの「将軍たちの計画」で南部に追われ、故郷にもどるためネツァリム回廊の南端で待っていた人々は、1月27日のトランプ「ガザからの追放」宣言を受けて毅然とした民衆の意志を示します。50万人を超える人たちが北を目指して帰還の一大行進をおこなったのでした。



爆撃を受けるネツァリム回廊で待つ人々



50万人のガザ北への帰還の一大行進



勝利の喜び Gaza is not for Sale

しかし戻った先で待っていたのは我が家の完膚なき破壊、数千人とも言われる瓦礫の中に埋もれた家族を救うこともできず、路上には白骨化した人の死体、そして寝るところもない路上生活、水も食料も電気もない生活でした。それでも家族を殺される中で生き残った人たちの、故郷を捨てない決意は固いのです。遺体掘り起こしのための、そして復興のための重機、テント（20万張りに対して現状2万）、仮設住宅、燃料、水などの最重要物資の搬入妨害など、国連機関の要請が通らないまま、「人質解放の延期」は停戦合意違反を世界に知らしめる最後の手段でした。

2月14日、やっとテントは検問を抜けましたが、仮設住宅、重機についてはまだ留め置かれています。それでも妥協して次の捕虜を解き放つことになりました。なぜ、ガザの人々が声を出すこともなく苦難を強いられているのか、イスラエルの非人道的なジェノサイドを世界は報道しないのか、理解できませんが、これが1948年から77年間続いてきたことなのです。



瓦礫の山の上で復興を目指す



やっと搬入許可されたテント



人質解放後も検問所で待機する重機、仮設住宅



ネツァリム回廊



ヨルダン川西岸地区ジェニンへの空爆



ジェニンへの侵攻、2万人の強制移住

### トランプ発言の裏で何が行われているのか？

ガザを破壊したのはイスラエル、武器と後方支援をおこなったアメリカです。1兆円を超える兵器、ヒロシマ原爆6個分の爆弾を落とした結果であり、戦争犯罪の訴求とは別に補償責任があります。モノに執着するトランプ氏は「地獄」と言います。しかしながらガザの人々にとってはどんなに破壊されても1948年に奪われ残った土地を守り続けた、離れることができない「愛する故郷」と胸を張って言います。トランプのリビエラ発言は土地に根を張って生きている人々の、世代を超える魂 (SOUL) を理解していません。

トランプ氏は、突飛と思われる発言も繰り返すうちに民衆が麻痺して次第に順化していくことをよく知っていて、様々な手段を使って繰り返し、実施可能な状況を作り上げています。

停戦を破棄して10月7日のような非道な爆撃をしても、世界は「ああ、またか」という反応を示すだけ、抗議をして終わるよう導こうとしています。恐怖を与えて50万人の北ガザ住民を南部またはレバノンに強制移動できれば、あとは雪崩を打ったようにガザの無人化、次には西岸北部のジェニンを、という民族浄化への歩みに踏み出せます。1948年のイスラエル建国前にパレスチナのディルヤシーン虐殺による80万人の民族浄化 (ナクバ) の再現になる可能性があります。

以下はネタニエフ首相の次のステップとされるものです。

- (1) 10月7日にハマスが分離壁を突破しても何の反応も示さない。
- (2) これを口実に何万人もの大量虐殺を行い、トランプ氏の「建設現場」を作る。
- (3) そこには誰も住むことはできない。パレスチナ人は他の国に移住させなければならない (ガザの土地を民族浄化する)。
- (4) イスラエルは、アメリカユダヤ人協会のミリアム・アデルソンのトランプへの1億ドルの支援によって、入植を推進し、占領下のパレスチナ西岸地区を併合する。
- (5) ガザをイスラエル人のための海辺のリゾート地として再開発する。
- (6) 大イスラエルの確保に着手し、エルサレムのイスラム教神殿 (アルアクサモスク) をユダヤ教の「ソロモン神殿」に置き換える。

すでにガザを人の住めない土地とする(2)ステップまで進んでおり、「将軍たちの計画」は(3)ステップの最初の作戦として停戦前の3ヶ月、北ガザ住民を追い出して実施されました。停戦によって帰還を果たしたガザの人々に対してその意思を挫く策動をいつ、どんな形で起こすのかが、イスラエル、アメリカで今、協議されています。

完全に方向性の一致しているトランプ政権の対パレスチナ政策は、ガザの人々の意思を挫くためできる全ての「外堀を埋める」施策を躊躇なく大統領令として発行しています。抛出金額で圧倒的な力を持つアメリカの決定はガザの人々の強い意志を砕くだけの力があります。ガザ市民の移動先とされるヨルダン、エジプトへの締め付け、アブラハム合意（アラブ諸国とイスラエルの国交）の最重要国であるサウジアラビア、UAEへの利益供与による取込み作戦は水面下で進んでいます。

#### パレスチナ関連のトランプ大統領令

- (1) UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）活動禁止の容認  
イスラエル国内での活動禁止の発令の後、最大の供託金を出すアメリカが完全に停止するとパレスチナ国内外の難民の生存が危険な状態になります。
- (2) USAID（アメリカ国際開発庁）の廃止  
全世界で医療品や食料品、その他の人道支援金を提供しており、廃止によって国際NGO、国連の支援が停止します。
- (3) ガザ住民のヨルダン・エジプトへの「一掃」（=民族浄化）要求
- (4) 西岸へのユダヤ人入植者への制裁解除
- (5) レバノン南部のイスラエル軍駐留継続の容認
- (6) イスラエルへの弾薬、最新鋭ミサイルを含む74億1000万ドルの軍事売却の承認
- (7) 2000ポンド大型爆弾のイスラエルへの供与再開：大規模空爆が可能に
- (8) ICC（国際刑事裁判所）関係者への制裁の実施  
ICC赤根所長に対する制裁に対してフランスやドイツ、英国など80カ国は2月7日、非難する共同声明を出した。（日本はまだ）
- (9) 反ユダヤ活動（イスラエルのジェノサイドに反対）留学生を国外追放  
ガザだけではなく、西岸併合の容認などに踏み込む可能性があります。

今や、イスラエルとアメリカは一心同体です。

これだけ用意周到に力を持っているアメリカが全方位でその力を使い、圧力をかけている今、イスラエルに供与された武器が使われるのか、ではなく、いつどんな口実で使うのか、です。ガザの復興を不可能にする状況を作り出しながら、「人質の全員解放」、「ハマスの解体」という世論を作り出し、今まで通り「ハマスが・・・」という流れの中で殺戮と破壊を開始するのではないかと考えられます。

この記事を書いている2月17日から記事が読まれる時までどんな変化があるのでしょうか。北部の市民が退避を命じられる時、人の「命」をも超越している民族の「魂」を守ることができるか、「力による平和」の名の下、民族の文明を育む「大地」を捨てさせられることになるのか、事態は少しずつ厳しいものになってきました。それでも私たちはガザの、そしてパレスチナの人に寄り添っていかねばなりません。

私たちキリスト者の平和は「誰も欠けることのない平和」です。77年間耐え抜いてきたガザの人々はその土地を通して働いておられる創造主に命を預けてこられました。その「しなやかさ」が兵器の力に17ヶ月打ち勝ってきました。祈り、見守っていきたいと思います。



「合理的配慮ってなに？」 その5

障がい者委員 吉川 康夫

それは、障害を持つ人が、障害を持たない人と同等の機会を得るために、事業者が提供しなければならない対策や設備のことです。

これらの具体的な対策や設備の提供は、2024年4月1日から努力義務ではなく、義務とされています。

(参考)「合理的配慮」の英語は“Reasonable Accommodation”です。「納得できるお互いの調整」と訳すと分かり易いです。「無理をしなくてよいのなら、やらなくてもよい」ということにはならないのです。 (シナピスニュース 10月号の補足説明)④

法律には、「障害のある人から申出があった場合に・・・」とあります。

◎「合理的配慮の提供」を求めることをためらわずに声を上げましょう！

具体的に申し出ることが、大切です。

「何とかしてください」ではなく、「配慮してください」ではなく、「困っています」ではなく、「宜しくお願いします」ではなく、どうしてほしいかを伝えましょう。

イエスさんは、お尋ねになられます。「どうして、ほしいのか？」と。

ルカ福音書 18章 1～8 の「うるさいやもめ」のように訴え続けましょう。

そして、最後はヨハネの黙示録 3章 14～22 に書かれているように、イエスさんが戸を叩いてくださるでしょう。

◎具体例 ①「聞こえないので、手話をつけてほしい。」 ②「手話がむずかしいのなら、要約筆記をつけてほしい。」③「要約筆記がむずかしいなら、ノートテイク(筆談)をしてほしい。」

④「聞こえにくいので、大きな声で話してほしい。」 ⑤「マイクに近づいて話してください。」

⑥「マスクを外して、話してください。」⑦「見えないので、配布物の点訳、点字訳がほしい。」⑧

「点字訳になっていない文章は声を出して読み上げてほしい。」⑨「大きな文字の印刷物をください。」⑩「ゆっくりと大きな口を開けて、話してほしい。」⑪「誰かが話している時は、他の人は黙っててください。」⑫「前に、座らせてほしい。」など、など。

※具体的な要望の事例を、障がい者委員会にもお教えてください。

☆内閣府のリーフレットをダウンロードしたい方はこちら

[https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai\\_leaflet-r05.html](https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai_leaflet-r05.html)





## フレンドリーの「合理的配慮って何？」に参加して

(匿名希望)



今回、久しぶりに会合に参加させていただいて本当に良かったです。

直接お会いした方が、その方のジェスチャーや話をしている雰囲気などがリモートよりもわかりやすく、ミーティングに参加するなら直接足を運んで生の空気を味わいたいと思っていました。

私は発達障害とは診断されてはいませんが、その傾向があると感じていて、フレンドリーの会に参加するようになりました。人とのコミュニケーションの基本がもともとよく理解できず、母ともうまく関われませんでした。小学生の頃にもいじめを受け、極端に自分に自信がなく不安になる反面、逆に弱い立場の人にはイライラすることも多かったように思います。

教会でも人との距離感が分からず、孤立していき、結局誰のことも信じることができなくなり、体力がなかったこともあります。行けなくなってしまいました。

久しぶりに行っても、「あなたは別に来なくていいよ」という空気の人もいて、「たかがその程度の存在なんだ」と思いたくないので、結局行きたくなくなるのが自分でした。

でも今日のミーティングの参加者へのフィードバックのための吉川さんの言葉を聞いていたら、「現状が辛いんですね。いや、現状という言葉は難しいから…毎日が辛いんですね」とか、「理解が難しいのではなく、わかりにくいんですね」とおっしゃっていました。

今の私の教会に対しての「メンタル、現状が辛い」と、周りの人とどうかかわるのが難しいのではなく、そういうことが「私はわかりにくい」とそのまま自分に置き換えることができ、非常に心に響きました。他の参加者の言葉が、自分の教会に対する気持ちをまさに共感してもらった気持ちがしたのです。

「母ともうまく関われなかった」と書きましたが、その理由は母に共感してもらえなかったから、私も母を警戒して自然と心の壁を築いてしまっていたのだと思います。その当時の悩みは、今でいうセクハラ行為に対する心の傷だったのです。それを母に共感してもらえなかったのです。私は人に対しても、何を考えているのか良く分からないと感じるようになっていきました。それをいくら言っても分かってもらえず、人と対話することをあきらめていたのです。実際、人の話を聞く余裕のない人はいくらでもいます。私もきっとそんな人のうちに入るのかもしれない。

でも、弱い自分にも共感して、無条件に人としてオープンに声をかけてくれる人となら、私も心を開いて話をする事ができるのです。参加者の方で親しげに声をかけてくれた方がいてくださいました。その方とは私も仲良く話しができました。彼女は「自分が発達障害だからと言って、話に入っていったら迷惑だから黙っておこうとか、そういう選択って、自分が持っているタレントを地に埋めたままにすることと同じだ」と言っていました。

音楽に親しむ生活をしていた時、「音楽をしていることは感性を養うこと」だと言われた電子オルガンのコンクールの審査員の言葉に感動したことがあります。

私は確かにこれで感性を培うことはできたかもしれませんが、逆にコミュニケーション力や常識的な関わり方というものには全く役には立ちませんでした。だから、「タラントンって何？」とよくわからない私がやはりどこかにいつもいました。一番の喜びは、「神が共に居てくださると感じる事ができるつながりがあること」ですね。

きっとそんな関係の中に、自分のタラントンも自然に出せるようになるのではないかと…そう信じています。

# シナピス 移動学習会 「モザンビークの現状 その2」報告

実施日時: 2025年1月11日(土)午後2時~3時30分

実施場所: カトリック泉佐野教会 会議室

講師: イポリト神父

参加者: 13名(和泉1名、浜寺1名、岸和田2名、泉佐野2名、泉南3名、  
岬1名、紀の川2名、シナピス1名)

主催: 岸和田地区宣教評議会社会活動委員会

共催: カトリック大阪高松大司教区 シナピス

## 《主な内容》

- ① 社会活動について
- ② 慈悲の業
- ③ 井戸プロジェクトの報告
- ④ 新しいプロジェクト
- ⑤ モザンビークの現状



まず初めに、「毎日、人が亡くなっている」という神父様のことばがありました。

そして、社会活動について、「ヤコブの手紙 2 章 18 節」の紹介があり、慈悲の業の肉体的なもの七つと心についての七つの慈悲の行いのすすめの紹介がありました。

そして、プロジェクトの詳しい報告と、現地の方々の感謝の言葉がありました。

次に、神父様の新しいプロジェクトの紹介がありました。

- ① 「一人の信者、一つの家族」:これはひとりの信者に対して、一つの支援が必要な家族を紹介し、支援していく。
- ② 「持たざる者の服を着る」:古着や靴を現地で購入して、子どもたちに送る。

最後に、「モザンビークで大統領選挙が行われたが、民主的になることが認められずに独裁的な大統領が今後も支配しそうである」ということが報告された。

## ○●○参加者アンケート○●○ (回答9人より)

① 学習会に参加してどのように感じましたか。 とても良かった6人、良かった1人

② 特に心に響いたこと、気が付いたことは?(自由記載)

教会が社会活動に関わる理由を紹介してくれたこと。

ヤコブの手紙のことばについて、初めて知りました。

水の周りの人々の生き生きした姿が印象深かった。

③ ご感想をお聞かせください。(自由記載)

何ができるか改めて考えることが、一步踏み出すことなのでしょうか。

イポリト神父様が続けられるプロジェクトに、ぜひ参加したいと思いました。

参加人数が少なかったですね。神父様の講話の内容は大変良かったです。





## 投稿欄 ガリラヤの風

玉造教会信徒 みき 三木 りょうこ 良子

### 【キャベツとお米の価格から地球温暖化について考えたこと】

地球温暖化と気候変動について、こんなに真剣に考え始めたのは、今年の元旦の英語のミサで会った Paul さんの話を聞いてからです。

Paul さんは、「教会は貧しい人達や災害の中にいる人達のことは大切に考え、対処するけれど、地球温暖化対策のことは殆ど考えていないような…。そのための方法をとっていないかのようだ。直ぐにでも対策をしなければ私達の生活は貧しくなる」と話されました。

それを聞いて思いあたったのは、日本の天気予報の言葉の曖昧さや、去年の夏にお米がスーパーの棚から消えたことでした。

お米が消えた理由は、天候不順のためにお米が不作であったことと、インバウンドの人達が増加してお米をたくさん消費するからだという説明がなされました。

この天候不順について、サラリと流すのではなくもっと気候変動の影響の説明が必要だと思いますし、そのことが確実だと思ったのは去年からのキャベツの価格の異常な値上がりです。

「去年の夏は長く、暑くて雨も降らず、8~9 月にはキャベツの種が根付かず、それでキャベツが育たなかった」とニュースで聞いたのは、去年の 12 月でした。

地球の平均気温は約 15 度を超えると、早ばつや洪水も増えていくとのこと。例えば、去年の夏のキャベツに関して言えば、キャベツ畑は早ばつで、夏には各地で線状降水帯が起こりました。しかし、日本の天気予報では「洪水」とは言わず、綺麗な言葉で表現して、本質を隠していると思いました。天候不順、気候変動ということばは毎年のことで、聞き流してしまっています。地球温暖化による作物の影響は、直に深刻に自分のものだと思って考えたことがなかったのです。でも、「キャベツに千円近いお金なんて出せない。大好きなお好み焼きが、ビフテキのように高額になるのは耐えられない」と思い、シナピスに地球温暖化対策のチームができれば良いなと思って、お願いしたいのです。

統計を見ると怖くなります。5 年後の 2030 年の地球は「平均気温が 2 度上昇すると、熱波や干ばつ、豪雨などの被害が深刻で、海面の上昇にも生態系にも影響を与える」と予測されています。

そんな状態の地球なのに、日本政府は「2030 年にはインバウンドを 6 千万に増やしたい」という政策を立てました。ちなみに去年のインバウンドの来日は 3687 万人でした。

先の見通しが立たない私達ひとりひとりの地球温暖化対策に、曖昧なことしか発信しない日本政府の対応は、私達を愚国民化しているのではないかと思います。

地球温暖化についての資料も対策方法もたくさんあります。私はただ適正価格でお好み焼きを食べたいし、インバウンドの人達とお米の奪い合いはしたくないだけです。

その適正価格のキャベツを守るために、イエスさまを愛するように、地球をもっと愛して、できることを調査し、応用し、対策も識別して発信できる場があればとお祈りしています。

想像してみてください。2050 年の地球の姿を！

「私達はもう永遠の命にあずかっているから関係ないわ」の問題ではないのです。

## 事務局こぼれ話

ビスカルド篤子

### 頭の柔らかい世代のみなさんが新しい風を吹き込んでくれました！

#### 1月25日 大阪星光学院中学・高校の生徒たち

大阪星光学院の中高生たちがシナピスを訪れました。「難民について知ろう」と、20名ほどの有志が集まってくれたのです。そこで私は皆さんのごく身近な大阪で暮らす難民申請者、ルイスさん(仮称)を紹介しました。

若者たちが世界の難民に出会う時を持つ。この貴重なひとときに、大人の講釈はいりません。私からは、シナピスに身を寄せる難民たちの大まかな背景だけを説明をして、あとは全てルイスさんにお任せしました。生徒たちはルイスさんの語りに身を乗り出して聞き入り、次々に手を挙げてルイスさんに疑問点を投げかけてゆきました。遠慮なしの直球の質問は、一気にルイスさんと生徒たちとの距離を縮めてゆきました。

実はルイスさんは、祖国では有名なレスリング選手で、民族的差別と迫害がなければオリンピックに出場したはずの人でした。ルイスさんが20代の頃、彼よりも格下の選手がオリンピックに出て入賞したことがあり、ルイスさんは当時の無念さを語りながら、国際大会で手にした数々の金メダルを見せました。生徒たちは群がってメダルを手にしていました。

またルイスさんは、全日本社会人レスリング大会にも毎年出場し、2023年度は銀メダル、2024年度は銅メダルを獲得しました。「今年度の金メダルは25歳の自衛隊の人、銀メダルは25歳の元警察官だった。銅メダルの私は、スポンサーのない34歳でした」とのルイスさんの言葉に、生徒たちは何とも言えない声を出していました。会の最後に生徒たちがルイスさんにタックルを挑みましたが、あっさり押し返され生徒たちは笑い声をあげました。

ルイスさんの言葉を聴き、タックルしたり握手したり、生徒たちが「来てよかった」「僕たちにできることを考えたい」と言ってくれたことが、とても嬉しかったです。



#### 2月15日 京都暁星高等学校の生徒、難民と語る

京都暁星高等学校の生徒が一人、シナピスホームにやってきました。

私たちは難民さんたちが覚えやすいように彼に「ラックくん」とニックネームをつけて、その日のメニュー、アフガニスタン料理を振舞いました。ラックくんは食後のお茶を飲みながら、付き添いの先生と一緒に難民の人たちと語り合いました。色々話すうちに、ラックくんは「自由」について、難民たちから問いかけられました。

一人の難民に「人間にとって、自由がいかに大切か。全ての自由が保障される日本にいたらあまりわからないでしょう」と問われたラックくんは、「はい、あまり意識したことないです」。

難民たちは「自由を奪われた社会」がどんなものか、それぞれの経験を語りました。特にアフガニスタンの女性の証言は先生とラックんに衝撃を与えたようです。

「道で自爆テロが起こり、人びとが怪我人を助け出そうと現場に集まると、2度目の自爆テロが起こり、更に犠牲者が増えた。人の肉片が飛び散った」、「タリバンが支配してからは、女子は学校に行けなくなった。

男性家族を伴わずに外出したら罰せられる」、「金の腕輪をしていた赤ちゃんが道で腕ごと切り落とされて持ってゆかれた」…彼女は泣きながら、無法で無秩序な自国での生々しい体験を語りました。

時間を忘れてラックくんは、その言葉にじっと聴き入っていました。

帰る時間になり、ラックくと先生が荷物を担ぐと難民たちが「いつかまた来てくださいね」と言いました。

「はい！」ラックくんの決意ある返事は私たちにまっすぐ響きました。



## ♪ シナピス発「ゆるゆる茶話会」はじめました ♪

学校や職場とは異なる場所で人に出会い、お茶を飲みながら「ちよっともやもやした思い」を語り合う。そんな、ゆる～い茶話会をシナピス発でやることにしました。

発端は「社会のできごとって、意外に身近な友達や職場の同僚とは話題にできないところがある。遠慮せずに語りあえるような仲間がいるといい」との若者たちの声を聞いたことでした。「それならあまり縛りのないゆるい茶話会でもやる？」ともちかけてみました。

どんな会にする？誰が音頭とる？どれくらいの頻度で集まる？リモートじゃなくて対面原則で？…と、あれこれ意見を聞いたら、こんなふうにとまりました。

**\*社会活動センター・シナピスを交流の場に**

**\*シナピスのモットー「谷間に置かれた人びとの心を生きる」を中心に据えて**

**\*特にテーマも何も決めない。敷居をつくらない**

とりあえず、言い出しっぺの数人が、それぞれ声をかけあって2月9日に集まることにしました。

急なよびかけでしたが、その日には9名が集まりました。

年齢層は、20代3名、30代2名、40代1名、60代2名、70代1名。学生、公務員、フリーランス、主婦、と、背景も様ざま。

「じゃ、とりあえず自己紹介から」と会を始めると、自己紹介を一巡しただけで一氣に対話が進んだのです。

「私の両親は中国籍」、「私は在日4世」、「私の娘はチャイニーズアメリカンの人と結婚して」、「私はペルー人で日本国籍取得」…10人足らずの会なのに、海外に縁がある人が半数以上で、話は自然に「アイデンティティ」について絞られていきました。

自身が2世だったり4世だったり、国籍も多様で、茶話会は大いに盛り上がり、あっという間に時間が過ぎてゆきました。



参加者のお一人、絹川誠さんが感想を寄せてくださいましたので、詳しくは次ページをどうぞ。

**この「ゆるゆる茶話会」、当面は月イチぐらいで開く予定です。**

**次回は3月2日(日)15時～17時です。**

**場所は社会活動センター・シナピスにて(大阪府大阪市中央区玉造2-24-22)**

**会場準備の都合がありますので、参加ご希望の方はシナピス事務局までご一報よろしく!**



## 第1回 シナピス “ゆるゆる茶話会” 報告



枚方教会所属 絹川 誠

先日、シナピスにて「第1回 シナピス “ゆるゆる茶話会”」が開催されました。様々な背景を持つ人々が集まり、それぞれの視点から活発な意見交換が行われました。

「ゆるゆる茶話会」は、「谷間に置かれた人々の心を生きる」という旧大阪教区新生計画のテーマを大切にしながら、人々が集まり対話を重ねることで、参加者それぞれに新たな気づき生まれ、それが社会的に価値があるものに繋がるのではないかという思いからスタートしました。

記念すべき第1回目となる今回は、海外にルーツを持つ人々の「アイデンティティ確立の難しさ」や、「日本社会における帰属意識のあり方」について、参加者自身の経験に基づいた生の声が共有されました。

参加者からは、「制度的排除」が海外にルーツを持つ人々の「日本への帰属意識」を阻害しているという指摘や、周囲から自国の代表のように見られることへの苦痛を訴える声がありました。

議論は国家や国民の概念にも及び、「国籍」「血統」「文化」といった要素の曖昧さについて様々な意見が飛び交いました。

帰化問題についても議論され、帰化することによる「日本人でないというアイデンティティの喪失」や、帰化しないことによる「強制送還の不安」など、複雑な感情が共有されました。

参加者からは、「文化の違いを受け止め、主張しながら折り合いをつけることの重要性」や、「国家の必要性、国民の定義についての考察」など、多くの示唆に富む意見が出されました。

私自身は海外にルーツはないのですが(何世代も遡ればわかりませんが)、海外にルーツを持つ人の悩みを聞く中で、それを自分事として捉えることの難しさを感じるとともに、自分事として捉えることの大切さを感じました。

「エンパシー」という言葉があります。「エンパシー」とは、意見の異なる相手を理解する知的能力で、「他者の靴を履く」とも表現されます。今回のゆるゆる会議ではまさに「自分の靴を脱いで、他者の靴を履く」という心の作業が必要なタイミングで、普段の生活では感じることのできない様々な感情を体験する機会となりました。

次回の「ゆるゆる茶話会」は、3月2日(日)15~17時に開催予定です。これからこういった展開が待っているのか、わくわくしています。



## シスター・マリアのお話を聞いて



1月22日、長年、釜ヶ崎で支援活動に携わってこられた、聖母被昇天修道会のシスター・マリアを囲んでお話を聞く会が、教区本部事務局で開かれました。参加されたシナピスのスタッフの皆さんに、参加しての感想をお聞きしました。

釜ヶ崎での夜回りで、「(その方のところに置いたはずのおにぎりが無くなってしまって) 今度は外から見えないところに置いておくね」とシスターが言われたとき、その方は「いいじゃないか。誰でもお腹が空いている人が食べられたのだったら」とおっしゃったというお話が心に残りました。私も「いいじゃないか」と言える人になりたいと思いました。(岡田 雅代)

シスター・マリアの講演はとても貴重な時間になりました。

お話は、支援した相手の様子がすごくよくわかるという特徴があり、本来であれば人間同士の繋がりなのだから、こうでないといけないといつも思います。

「福音は行動」この言葉通り、私も頑張ろうと強く思いました。(山田 直保子)

シスター・マリアの話聴いて、神様は、シスター・マリアを釜ヶ崎で待っていたんだな~と思いました。もちろん、釜ヶ崎へ来るまでもシスター・マリアは修道女として召命を生きていたけれど、野宿者、日雇い労働者、支援者たちとの出会いから、シスター・マリアはもう一度、洗礼を受けたんだな~と思いました。生き生きとした語りは喜びと確信に満ちていて、素敵な信仰告白を聴かせていただきました。(大森 雄二)

あの日のマリアさんのことば。

—福音を教えるのではなく、福音を生きる。これに尽きます。

—福音はキリスト者のためだけにあるのではなく、世の全ての人のためにあるんです。

毎週木曜日、社会活動センター・シナピスの事務局に静かに座っておられるマリアさんは、変わらずいつも仰います。

「**全ての人、全て、全て。フランシスコ教皇が仰るとおり、Todos, Todos, Todos!**」と。ことばはマリアさんそのものであって、いつも私を明るくしてくださいます。(ビスカルド 篤子)

活動へのご支援ご協力を  
よろしくお願いたします。



電化製品、お米・乾麺・調味料、  
日持ちのする食料品、外国語の聖書のご寄付をお願いします

\*比較的新しい家電製品やミシンなど  
\*日本語の聖書は不要です



お電話をお待ちしています!!

☎06-6941-4999



### シナピスホーム (カフェ)

3月の予定

カフェ: 1日、15日、22日  
★土曜日の13時頃~16時頃

ランチ: 29日  
★土曜日の11時頃~16時頃  
★ランチは要予約  
(電話) 080-8940-8847



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

ニュースレター配布停止ご希望の方は  
シナピスまでお知らせください。

あとがき

毎月一度、シナピスの広報に関わる人たちが集まって「広報会議」を開いています。「次号の巻頭言は誰に書いてもらうのがいいか?」「今後のシナピスニュースの企画として、どんなものがいいか?」...。毎回、侃々諤々な話しあいがおこなわれます。

シナピスニュースは、多忙なスタッフと数人の編集ボランティアで作成していますので、毎回、納期ギリギリの対応になります。原稿が届きしだい編集作業に取り組み、誤字脱字や事実の誤認がないかを確認し、不適切な表現などないかも確認します。

印刷の前には皆が再度集まって、「最終チェック」をおこないます。最終稿を皆で読みあって、誤字やわかりにくい文章などに手を加えていきます。シナピスニュースは、読者の皆さんからの原稿が多いため、スタッフ側の一方的な考えで文章を変更するわけにもいきません。許容される範囲で手直しをしてから、筆者の確認も取ります。

このように十分に配慮しているつもりですが、それでも不適切な表現が残ったり、作者とのコミュニケーションミスが生じたりもします。ニュースの編集とは、本当に難しいものだと思います。さまざまな失敗を繰り返しながら、徐々にではあるものの、皆さんに納得してもらえぬニュースづくりや広報のあり方を学びつづけているところです。(いたる)

## ▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

### ◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等  
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ  
機関誌としてシナピスニュースを発行

### ◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

### ◆学習会研修会の企画

### ◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

### ◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、  
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

### ◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

### ◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

**難民移住移動者 相談ダイヤル**

☎ 06-6941-4999

### アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



### ●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

### ●車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

## 活動へのご支援ご協力をおねがいます

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

